

生活科に関する目標・内容の 構造化等について

検討すべき論点

【第2回総則・評価特別部会で示された構造化・表形式化イメージ】

目標

● ● する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、● ● することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能 (見方・考え方)	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------------------	--------------	--------------

● ● （当該教科で扱う事象や対象）を ● ● （当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）、● ● （当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

内容

（並列パターン）

知識及び技能に関する統合的な理解 XXXXXXXXXXXXXX	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 XXXXXXXXXXXXXX
知識及び技能 ・XXXXXXX ・XXXXXXX	思考力、判断力、表現力等 ・XXXXXXX ・XXXXXXX

（並行パターン）

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 XXXXXXXXXXXXXX	1)	・XXXXXXX	・XXXXXXX
	2)	・XXXXXXX	・XXXXXXX
	3)	・XXXXXXX	・XXXXXXX
知識及び技能に関する統合的な理解 XXXXXXXXXXXXXX	・XXXXXXX ・XXXXXXX		

【本日の論点】

検討項目① 目標の柱書

・生活科の資質・能力の趣旨や学習過程について、目標にどのように記載すべきか



検討項目② 資質・能力の柱ごとの目標

・生活科の知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力・人間性等について、目標にどのように記載すべきか



検討項目③ 見方・考え方

・生活科の見方・考え方について、総則・評価部会の整理、第3回生活・総合WGで扱った、生活科を学ぶ本質的意義を踏まえてどのように考えるか



検討項目④ 内容の表形式化の具体的な形式

・内容の表形式化について、生活科においては現行指導要領上、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を合わせて示している中、生活科に適した表形式をどのように考えるか



検討項目⑤ 高次の資質・能力

・「高次の資質・能力」について、「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化を通じて「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする役割を担うこととされている中、検討項目③を踏まえ、生活科における「高次の資質・能力」をどのように考えるか





ワーキンググループにおける検討事項・論点①

令和7年10月15日会
教 育 課 程 部
生 活、総 合 的 な 学 習・探 究 の 時
ワ キ ン グ グ ル ー プ
資 料 1 - 1 (P . 3)

1. 教育課程企画特別部会の議論を踏まえた検討事項

(1) 生活科を通じて育成する資質・能力の在り方・示し方

- 「学びに向かう力・人間性等」や「見方・考え方」の新しい整理を踏まえた目標の示し方
- 中核的な概念等に基づく内容や各教科との関わりを含む一層の構造化の在り方
- 生活科の特質を踏まえた、表形式を活用した目標・内容の分かりやすい示し方

(2) 生活科の指導と評価の改善・充実の在り方

- デジタル学習基盤の活用や情報活用能力の育成強化を前提とした、生活科における「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実を図るための方策
- 資質・能力の育成のために効果的かつ過度な負担が生じにくい生活科の評価の在り方

(3) 誰一人取り残さず資質・能力を育成する柔軟な教育課程の在り方

- 義務教育における調整授業時数制度や、高等学校における科目の柔軟な組み替えを可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫の在り方
- 教育課程の柔軟化に伴って生じうる課題とそれを防ぐための運用の在り方

2. 生活科に関する課題を踏まえた固有の検討事項

(1) AI時代における生活科の在り方に関する検討の方向性

- 生活科の本質と価値を問い合わせ直す必要性
 - (例)
 - 情報活用能力の抜本的向上が求められる中、生活科が大切にしてきた「身体を通した直接体験」を中核に、その本質と価値を改めて問い合わせ直す
- 身体性を重視した、直接体験・多様な表現を行う機会の必要性

(例)

- インターネットやSNSなどを通じて得られる情報が溢れている中で、対象を認識し、自分との関わりをより明らかにすることが重要。そのために、児童が身体性を重視した直接体験を通して対象と関わり、発達に応じて言葉や絵、動作などの多様な表現と結び付けることによって、より体験を深め、気付きの質を高める活動を体系的に位置付ける

※ ここでいう「身体性を重視する」とは、身体を使って直接対象に関わるとともに、対象との相互作用を通して認識し行為することを意味する。

P.3の「1. 現状と課題、期待される学び」を踏まえ、生活科の本質的意義を明確にし、それが学校教育において發揮する教育的価値、位置付けを明らかにするとともに、深い学びを実装するための視点として「4つの本質的意義」を体系的に整理する。

2. 生活科がもつ4つの〈本質的意義〉

人間的な学びを実現するために、以下の4つの観点を本質的意義として位置付けてはどうか。

① 身体性 — 身体で世界を捉える（実感）

- 対象との関わり方として、触る、動かす、試すなど諸感覚を通して対象を捉えるとともに、単に「分かった気がする」でなく納得感を伴って「分かった」「できた」という手応え（実感）を得られるようになる。AIが提供する情報だけでは得られない、「身体で世界を捉える」体験や活動が、自分の外に広がる世界と確かな接点をもつ出発点となる。

② 対象と自分との関わり — 身近な世界に働きかけ、気付く（好奇心・探究心）

- 自分が触る、動かす、試すといった働きかけによって、身近なものの様子や変化に心を向けることを通して、身近なものが変化することを実感する中で、「自分が動くと対象となる世界が変わる」という手応えを得る。その経験が、「なぜ？」「どうして？」という好奇心や探究心を生み出し、自分との関わりで対象を捉える。
- 児童が自ら世界に働きかけることで、身近な人々、社会及び自然のよさや特徴などに気付くとともに、それらを身近に感じ、大切に思いながら関わっていけるようになる。

③ 他者と自分との関わり — 他者の思いや願いを尊重し、共に生活する（協働性・共感）

- 他者との関わりを通して、自分一人ではできないことも、互いに力を出し合うことでできるようになる経験を重ねる中で、相手の思いに気付き、受けとめ、尊重する態度が育まれる。他者との関わりから生まれる協働・共感の経験は、社会で共に生活するために重要であり、こうした経験を重ねることで、児童の学びは身近な人から地域・社会へと関係が広がっていくことになる。

④ 自己認識 — 自分という存在に気付く（主体性・自立性）

- 生活科の学びで、「自分はどう感じるか」「何が好きか」「何をしたいか」に気付き、その気付きが、自分で考え行動する主体性や自立性を育む。「自分はこう感じる」「自分はこう考える」からこそ、自分自身のよさや可能性、成長に気付けるようになる。



検討項目①

目標の柱書

1. 見方・考え方を含む目標の柱書きの示し方と改善の方向性

【現行】各教科等の目標の柱書き（例：中学校国語）

言葉による見方・考え方を働きかせ（見方・考え方）、言語活動を通して（学習過程）、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力（資質・能力の趣旨）を次のとおり育成することを目指す

【現行の解説】見方・考え方の記述

「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い合わせたりして、言葉への自覚を高めること」

＜現行の記述ぶりの課題＞

- 現在、各教科等の目標の柱書きには、①見方・考え方、②教科に特徴的な活動、③資質・能力の趣旨が記載されており、冗長で分かりにくいとの指摘。一方、特に「見方・考え方」の具体は解説に落とされており、併せて読まないと分からぬ。

＜論点整理で示されたこと＞

- 論点整理では、「見方・考え方」を、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核に焦点化した上で、その具体を、解説ではなく学習指導要領本体に位置付ける方向性を示している
- また、論点整理では、「見方・考え方」の意義について、「教科固有の様々な世の中を見る視点や考え方方が豊かになることで、徐々に資質・能力の育成を導く」といった観点だけでなく、「よりよい社会や幸福な人生に繋げる」ものと位置付けており、学校教育のみならず、その後の人生でも豊かに働くことを視野に入れている

分かりやすく、使いやすいを目指す上で

- 特定の学校種・教科で育成したい資質・能力の趣旨等を端的に表す目標の柱書きに、卒業後まで視野に入れた見方・考え方まで含めて書き下すと焦点が定まらなくなる
- 目標の柱書きは、育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示すべきであり、見方・考え方は、目標直下に別途欄を設け記載してはどうか

2. 1.を踏まえた書きぶり（イメージ）

（目標）

● ● する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、● ● することなどを通じて（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------	--------------	--------------

（見方・考え方）

● ● （当該教科で扱う事象や対象）を ● ● （当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）、● ● （当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

（見方・考え方に関する要素）

- 見方・考え方については、以下のような要素を含めることを基本に、各教科等の特質に応じて検討してはどうか
 - ① 当該教科等が扱う事象や対象
 - ② 当該教科固有の物事を捉える視点
 - ③ 当該教科固有の考え方や判断の仕方
- これらの要素を示す事により、教師が児童生徒の学習・指導を構想する際に「教科の本質を外していないか」を確かめられるものとなっているかという視点を大切にすることが重要ではないか

（見方・考え方の書きぶりに共通する留意事項）

- これまで各教科等の見方・考え方の書きぶりで示していた各教科等の深まりの鍵を示す部分は、構造化により示す中核的な概念等を通じて示すこととしているため、新たな見方・考え方の書きぶりについては現在よりも短く端的に示すことを基本としてはどうか
- 当該教科等を学ぶ本質的な意義の中核をわかりやすく示す観点からは、経験の浅い教師が読んでも端的に理解可能な記述となっているかという視点を重視して示し方を検討してはどうか（学習・指導を通じて、最終的に児童生徒が意識できるかという点も留意）

検討項目① 目標の柱書

- 生活科の資質・能力の趣旨や学習過程について、目標にどのように記載すべきか。



現状

現行の学習指導要領の記載

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(参考：解説抜粋)

- **(1)具体的な活動や体験を通すこと**：生活科の学習は、児童が体全体で身近な環境に直接働きかける創造的な行為が行われるようにすることを重視している。直接働きかけるということは、児童が一方的に働きかけるのではなく、それらが児童に働き返してくるという、双方向性のある活動が行われることを意味する。小学校低学年の児童は、その発達の特性から、対象と直接関わり、対象とのやり取りをする中で、資質・能力が育成されることを目的としている。
- **(3)自立し生活を豊かにしていくこと**：生活科では学習上の自立、生活上の自立、精神的な自立という三つの自立への基礎を養うことを目指してきた。



検討要素

- 現行の各教科等の目標の「柱書」には、「見方・考え方」、「教科に特徴的な活動」、「資質・能力の趣旨」が記載されており、冗長さや分かりづらさがあるとの指摘があり、総則・評価特別部会において改善イメージが示されている。
- 現行の生活科の目標は、児童の生活経験に根差した体験的な学習を通して、思いや願いを生かした主体的な活動と自己や生活への気付きを促し、学びが日常生活に循環していくことを重視して設定されている。
- 「論点整理」や「総則・評価特別部会」で示された方向性を踏まえ、生活科を学ぶ本質的意義にも留意のうえ、新たな「目標」イメージを検討してはどうか。柱書においては、端的に記載してはどうか。



改善イメージ

(第2回総則・評価部会)

● ●する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、● ●することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。

学習過程

(現行)

具体的な活動や体験を通して

(改訂イメージ)

身体性を伴う体験や多様な表現活動を通して
→現行の記載にある、児童が行う**「具体的な活動や体験」を明確**にするため、第3回WGで本質的意義として整理した**「身体性」の観点を明確**にしてはどうか。
このことにより、体験を通した内化と、言葉などの多様な表現活動による外化とが往還する過程を明確にし、対象を自分との関わりで抽象的な理解の足掛かりになる実感を伴って理解していく低学年の特性を生かした学びの充実を目指してはどうか。

改訂案

自立し生活を豊かにしていくための資質・能力について、
身体性を伴う体験や多様な表現活動を通して、
次のとおり育成することを目指す。



検討項目②

資質・能力の柱ごとの目標

検討項目② 資質・能力の柱ごとの目標

- 知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力・人間性等について、目標にどのように記載すべきか。

現状

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自己との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようとする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

改善イメージ

● ● する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、● ● することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能

思考力、判断力、表現力等

学びに向かう力・人間性等



目標における「知識及び技能」の案

検討項目② 資質・能力の柱ごとの目標（知識及び技能）

- **他者との関わりを通してそれらの気付きを深め**：対象を個別に捉える視点に留まらず、身近な人々、社会及び自然、自分自身が互いに影響し合い、つながっているものとして気付くことに加え、他者との関わりを通して、無自覚だった気付きが自覚化されたり、個別の気付きが関連付けられたりすることで、精緻化されていく。世界の一部として関わっていることに気付くことを目標として位置付けてはどうか。
- なお、こうした世界の一部として関わっていることに気付くという生活科の固有の学びは、児童一人一人が自分の行為や感覚を起点として対象を捉えるという、生活科の本質的な意義として示した「対象と自分との関わり」とつながる。また、児童一人一人が体験や実感に根差した「気付き」を、生活科における知識としていることは、生活科の本質的な意義として示した「身体性」とつながる。このようなことから、生活科における「気付き」とは、児童一人一人の活動や体験の過程において生まれるものであることから、文頭に「活動や体験の過程において」と示している。

現状

活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。



改訂案

活動や体験の過程において、自分自身や身近な人々、社会及び自然の特徴やよさに気付くとともに、他者との関わりを通してそれらの気付きを深め、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。



目標における「思考力、判断力、表現力等」の案

検討項目② 資質・能力の柱ごとの目標（思考力、判断力、表現力等）

- **気付きや実感を基に：**児童一人一人の気付きや実感を基に考える活動により、その気付きが、次の考えを生み出すきっかけとなり、それらが関連付けられることで、思考力・判断力・表現力等を身に付けていくことを明確に示してはどうか。
- **考え方を巡らせ、多様に表現する：**生活科の本質的な意義である、対象を自分との関わりで捉える際の「気付きや実感」を重視し、自分の考えを行き来させながら気付きの質を高めるとともに、目標の柱書に示された「多様な表現」を、単なる活動手段ではなく、学びを外化・統合する重要な要素として明確に示してはどうか。

現状

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようとする。

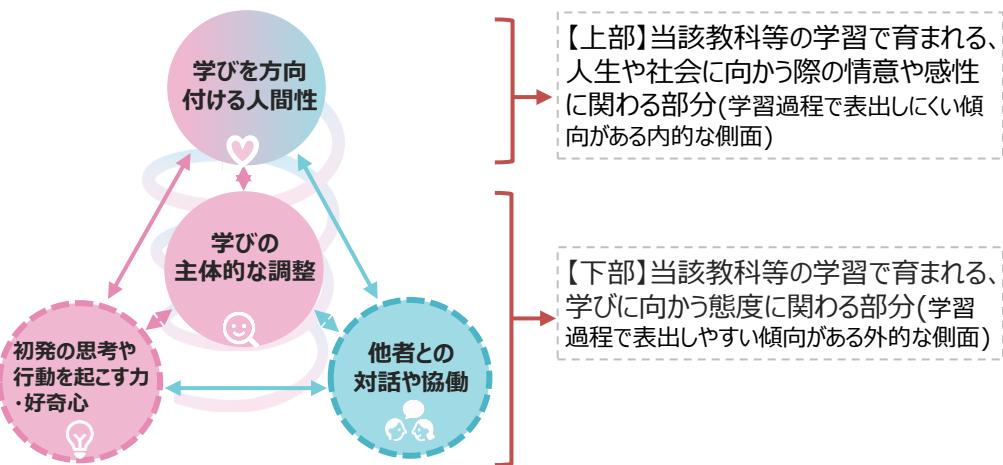


改訂案

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、気付きや実感を基に自分自身や自分の生活について考えを巡らせ、多様に表現することができるようとする。

1. 論点整理で示された方向性及び企画特別部会での議論

- 論点整理では、「学びに向かう力・人間性等」について、主要な要素や要素間の関係を構造化して分かりやすく示す観点から、下記の4つの要素により整理する方向性が示された
- 企画特別部会における議論の過程では、「学びに向かう力・人間性等」が単によりよい知の獲得に向けた力としてのみ捉えられてはならず、学習したことを踏まえて人生や社会に向かう際の情意・感性に係る側面も重視すべきとの強い意見があった



- また、論点整理では、「学びに向かう力・人間性等」の学習評価に関し、個人内評価を基本とした上で、学びに向かう態度に関する下部の3要素については、学習評価において、「思考・判断・表現」の過程で特に表出した場合には「○」をつける方向で検討する」とされている
- 「学びに向かう力・人間性等」は、学習指導要領の「内容」に原則として記載がなく、学習評価に当たっては教科等の「目標」を踏まえて行うこととなるため、そうした点も踏まえた「目標」の書きぶりが重要

※ 現行、各教科等において育成する「学びに向かう力・人間性等」は、個別の学習内容に応じて異なることが想定されにくいため、原則として各教科等の「目標」水準でのみ記載されている。こうした性質は、今回の論点整理に伴って変わるものではない。

2. 1. を踏まえた目標における書きぶり

- 1. を踏まえると、「学びに向かう力・人間性等」の目標については、全ての要素を個別に盛り込むうとすることで冗長となることを避けつつ、以下の2つの要素をバランス良く含めることとしてはどうか

① 当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度

学びにおいて、好奇心を持って初発の思考や行動を起こし、他者との対話や協働を経ながら、学びを主体的に調整し、次の思考や行動に繋げていく態度について、教科固有の学習過程を踏まえた言葉で示す
(現行の例：自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度（中・理科）)
→学びに向かう態度に係る3つの要素を踏まえた見直し

② 当該教科等の学習で育みたい情意・感性

人生や社会との関わりにおいて育みたい情意や感性を示す

(現行の例：自然を愛する心情（小・理科）、明るく豊かな生活を営む態度（中・体育）など)

- 一方、現行でも、複数分野を有する社会科など、多くの内容が盛り込まれ目標の書きぶりが複雑な教科もある中、分かりやすく使いやすい学習指導要領を目指す上では、今回の見直しで一層複雑となることは避ける必要
- こうしたことを踏まえ、目標については、表形式となることも踏まえ、箇条書きも利用して分かりやすく構造化することを可能としてはどうか（この点は知識及び技能、思考力、判断力、表現力等の目標も同様）



目標における「学びに向かう力、人間性等」の案

検討項目③ 資質・能力の柱ごとの目標（学びに向かう力、人間性等）

- 「論点整理」では、主要な要素や要素間の関係を構造化して分かりやすく示す観点から、4つの要素により整理された。さらに、総則・評価特別部会では、こうした要素を踏まえ、目標が冗長となることを避けつつ「当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度」と「当該教科等の学習で育みたい情意・感性」の2つの要素をバランス良く含めることが提案された。以上を踏まえ、目標が冗長とならず、かつ指導イメージをつかめるようにする観点から、以下の①②と分けて記述してはどうか。

<① 当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度>

- 自ら働きかけ：「やってみたい」「知りたい」「不思議だな」と感じ、自ら進んで関わろうとする要素を明確に示してはどうか。
【初発の思考や行動を起こす力・好奇心】
- 他者と協働し：現行では、学びの主体は主に個人として捉えられるが、学びに向かう力・人間性等が他者との関わりの中で育つ態度として明確に示してはどうか。
【他者との対話や協働】
- 状況に応じて関わり方を調整する：対象や他者、場面の違いに応じて関わり方を調整する要素を明確に示してはどうか。
【学びの主体的な調整】

<② 当該教科等の学習で育みたい情意・感性>

- 意欲や自信をもって：学びや生活をより豊かにしようと関わり続ける内的な原動力として明確に示してはどうか。
- 学びや生活をより豊かにしようとする態度：生活科の学びを一度きりの体験ではなく、次の学びや生活へつなげようとする個人内の成長を重視し、次の行動を生み出す人間性として明確に示してはどうか。
【学びを方向付ける人間性】

【補足イメージ 1】

現状

身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う



改訂案

身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、他者と協働し、状況に応じて関わり方を調整するとともに、(1)意欲や自信をもって、学びや生活をより豊かにしようとする態度を養う。(2)

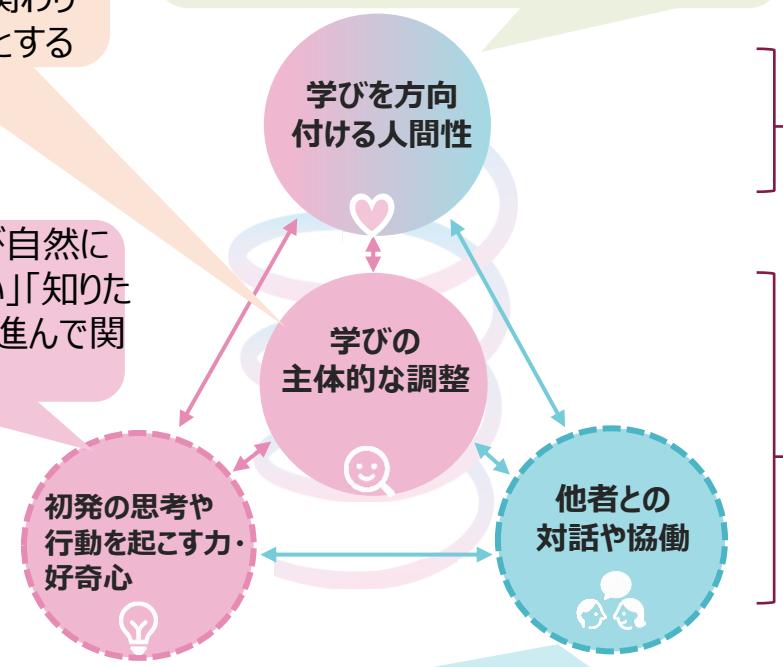
生活科における「学びに向かう力・人間性等」の要素（イメージ）

③自分の思いや考えを振り返りながら、「こうしたらどうだろう」「次はこうしてみよう」と関わり方や行動を考え直そうとする

①身近な人々、社会及び自然に関わる中で、「やってみたい」「知りたい」「不思議だな」と感じ、進んで関わろうとする

②友達や家族、地域の人などと関わりながら、気付いたことや思ったことを伝え合いながら一緒に活動しようとする

④身近な人々、社会及び自然との関わりを通して、自分なりの大切さやよさに気付き、生活をよりよくしていこうとする



2. 当該教科等の学習で育みたい情意・感性

人生や社会との関わりにおいて育みたい情意や感性を示す

1. 当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度

学びにおいて、好奇心を持って初発の思考や行動を起こし、他者との対話や協働を経ながら、学びを主体的に調整し、次の思考や行動に繋げていく態度について、教科固有の学習過程を踏まえた言葉で示す



検討項目③

見方・考え方

1. 見方・考え方を含む目標の柱書きの示し方と改善の方向性

[現行]各教科等の目標の柱書 (例: 中学校国語)

言葉による見方・考え方を働きかせ(見方・考え方)、言語活動を通して(学習過程)、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力(資質・能力の趣旨)を次のとおり育成することを目指す

[現行の解説]見方・考え方の記述

「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い合わせたりして、言葉への自覚を高めること」

<現行の記述ぶりの課題>

- 現在、各教科等の目標の柱書には、①見方・考え方、②教科に特徴的な活動、③資質・能力の趣旨が記載されており、冗長で分かりにくいとの指摘。一方、特に「見方・考え方」の具体は解説に落とされており、併せて読まないと分からぬ。

<論点整理で示されたこと>

- 論点整理では、「見方・考え方」を、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核に焦点化した上で、その具体を、解説ではなく学習指導要領本体に位置付ける方向性を示している
- また、論点整理では、「見方・考え方」の意義について、「教科固有の様々な世の中を見る視点や考え方方が豊かになることで、徐々に資質・能力の育成を導く」といった観点だけでなく、「よりよい社会や幸福な人生に繋げる」ものと位置付けており、学校教育のみならず、その後の人生でも豊かに働くことを視野に入れている

分かりやすく、使いやすいを目指す上で

- 特定の学校種・教科で育成したい資質・能力の趣旨等を端的に表す目標の柱書に、卒業後まで視野に入れた見方・考え方まで含めて書き下すと焦点が定まらなくなる
- 目標の柱書は、育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示すべきであり、見方・考え方は、目標直下に別途欄を設け記載してはどうか

2. 1.を踏まえた書きぶり (イメージ)

(目標)

● ● する資質・能力 (資質・能力の趣旨) について、● ● することなどを通して (学習過程) 、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------	--------------	--------------

(見方・考え方)

● ● (当該教科で扱う事象や対象) を ● ● (当該教科固有の物事を捉える視点) の視点から捉え (に着目して捉え) 、 ● ● (当該教科固有の考え方や判断の仕方) すること。

(見方・考え方)に含める要素

- 見方・考え方については、以下のような要素を含めることを基本に、各教科等の特質に応じて検討してはどうか
 - ① 当該教科等が扱う事象や対象
 - ② 当該教科固有の物事を捉える視点
 - ③ 当該教科固有の考え方や判断の仕方
- これらの要素を示す事により、教師が児童生徒の学習・指導を構想する際に「教科の本質を外していないか」を確かめられるものとなっているかという視点を大切にすることが重要ではないか

(見方・考え方の書きぶりに共通する留意事項)

- これまで各教科等の見方・考え方の書きぶりで示していた各教科等の深まりの鍵を示す部分は、構造化により示す中核的な概念等を通じて示すこととしているため、新たな見方・考え方の書きぶりについては現在よりも短く端的に示すことを基本としてはどうか
- 当該教科等を学ぶ本質的な意義の中核をわかりやすく示す観点からは、経験の浅い教師が読んでも端的に理解可能な記述となっているかという視点を重視して示し方を検討してはどうか (学習・指導を通じて、最終的に児童生徒が意識できるかという点も留意)



「見方・考え方」の現在の位置付け

- 前回改訂では、「社会に開かれた教育課程」を理念に掲げ、これから社会で生きていくための資質・能力を身に付けるための学びの過程として「主体的・対話的で深い学び」を提起した
- 一方、「主体的・対話的で深い学び」だけでは、
 - 各教科等の深い学びの具体的な姿がイメージしにくい
 - 各教科等の学びにより、人生や社会との関わりがどう豊かになるのかイメージしにくい 等の懸念が生じた

このため
- 資質・能力と教科等の学びを架橋するため、「見方・考え方」を提起し、各教科等の目標の一部として位置付けた（詳細は解説で記載した）

【定義】どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか
というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方
- 上記①②に対応し2つの側面で説明されてきており、授業改善に一定の成果があったといえる

側面① 各教科等の学びの深まりを示す

教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることで深い学びが実現され、よりよく資質・能力を育成でき、資質・能力の育成により「見方・考え方」が一層豊かになる

側面② 各教科等を学ぶ本質的な意義の中核を示す

学びを通じてどのような教科等固有の世の中を見る視点や考え方が身につくのかを示すことにより、教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにし、学びをよりよい社会や幸福な人生に繋げていく役割がある



課題と方向性

1. 当初の役割を十分に果たせていない

- 見方・考え方は各教科等の目標の一部になっているが、その具体は、解説を読まないと分からず
- 教科等によっては解説の記載が複雑かつ抽象的で分かりにくい（「見方・考え方」が①「各教科等の学びの深まり」と②「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核」という2つの側面を有していることも影響）

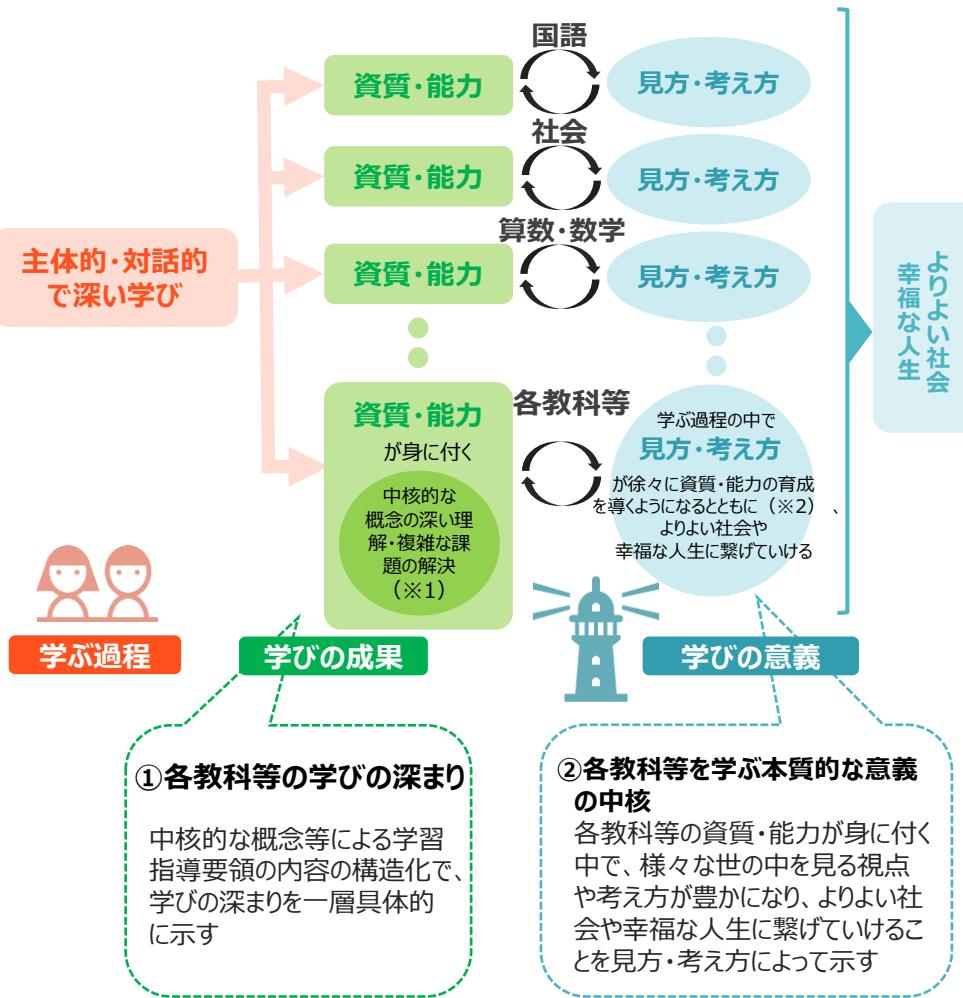
2. 「中核的な概念等」との整理が必要

- 第2・3回の特別部会では、各教科等の「中核的な概念等」の視点から
 - 個別の知識及び技能が相互に関連づけられた「教科の主要な概念の深い理解」
 - 個別の思考力、判断力、表現力を総合的に働かせた「複雑な課題の解決」
 を抽出し、一層の構造化を図ることとした
- この方針で進める場合、「見方・考え方」（とりわけ側面①各教科等の学びの深まり）との重複感が出る

これらを踏まえると

- 「見方・考え方」の側面①「各教科等の学びの深まり」は、「中核的な概念等」による資質・能力の構造化によって一層具体的に示す。
- 「見方・考え方」自体は、側面②「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核」に焦点化してより端的に示していくこととする方向で検討すべき

今後の見方・考え方の役割の改善イメージ



改善イメージ

目標

～以下の資質・能力を育成することを目指す。
(目標での見方・考え方の記載ぶりは別途検討)

(例) 事象を、数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的、発展的に考える

知・技

思・判・表

学・人

②本質的意義

教科の本質的な意義に焦点化して端的に示すことで教科を学ぶ本質的な意義を分かりやすく本則上で示すことができる

内容

中核的な概念の深い理解 (仮)

(例) 関数を使えば未知の状況を予測できる

知・技

(例) 比例・反比例の理解、一次方程式の解き方

複雑な課題の解決 (仮)

(例) 現実の事象を数式でモデル化し、未知の状況を予測して、具体的な解決策を選択する

思・判・表

(例) 二つの数量の変化・対応関係を見出し、式やグラフを用いて考察する

①学びの深まり

学びの深まりは中核的な概念等による構造化の中で、内容に即して具体的に示す

*従前の見方・考え方の整理は、見方・考え方が資質・能力の一部と誤解される遠因となっていたことから改善を図り、見方・考え方は、資質・能力（中核的な概念等を含む）の育成を的確な方向性に導くとともに、よりよい社会や幸福な人生に繋げていける学びの本質的な意義として整理する



「見方・考え方」の案

検討項目③ 見方・考え方（各教科等を学ぶ本質的な意義の中核）

- 各教科等の資質・能力が身に付く中で、様々な世の中を見る視点や考え方方が豊かになり、よりよい社会や幸福な人生に繋げていけることを見方・考え方によって示す。
- 目標の柱書は、**育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示すべき**であり、見方・考え方は、目標直下に別途欄を設け記載してはどうか。
- 生活科については、体験活動や関わりが重視されてきた経緯を踏まえつつ、それらを通して最終的に育成したい見方・考え方を明確にするため、**本質的意義を整理し直し、目標との関連を考慮しつつ、本質的意義の中核を位置付けてはどうか。**

書きぶりイメージ

(教科で扱う事象や対象) を
(教科固有の物事を捉える視点) の視点から捉え (に着目して捉え)
(教科固有の考え方や判断の仕方) すること

留意点

- 現行より短く端的に
- 経験の浅い教師が読んでも端的に理解可能な記述に

現状

身近な人々、社会及び自然を
自分との関わりで捉え、
よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとするこ

(参考①) 解説

身近な生活に関わる見方は、身近な生活を捉える視点であり、身近な生活における人々、社会及び自然などの対象と自分がどのように関わっているのかという視点である。また、身近な生活に関わる考え方とは、自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程であり、自分自身や自分の生活について考えていくことである。具体的な活動を行う中で、身近な生活を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとするようになり、そこでは、「思考」や「表現」が一体的に繰り返し行われ、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が育成されることを示している。

1. 教科で扱う事象や対象

身近な人々、社会及び自然を：事象や対象は引き続き現行の記載を生かしてはどうか。

2. 教科固有の物事を捉える視点

自分との関わりや、自分と他者との関係の中で捉え：第3回WGにおいて生活科を学ぶ本質的意義として整理した4つの視点のうち、現行の見方・考え方で明確になっていない要素である「**他者と自分との関わり**」をより明確にしてはどうか。対象を自分との関わりで捉えることを基盤としつつ、他者との関係でも捉えることと整理してはどうか。

なお、**生活科の本質的意義である「身体性」**は、学習の前提・方法・過程として重要であり、**目標の柱書として学習過程で明示されるべき要素であることや、見方・考え方が教科固有の考え方や判断の仕方を示すものであることから、ここでは記載しないことについてどう考えるか。**

3. 教科固有の考え方や判断の仕方

よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとするこ：生活科における学びの方向性と学習過程を示し、**幼児期までに培われた資質・能力を生かして主体的に学ぶ教科特性を明確に示してはどうか。**

身近な人々、社会及び自然を（身の回りの世界（生活や暮らし））

自分との関わりや、自分と他者との関係の中で捉え（自分と世界（生活や暮らし）との関係）、

よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようること（世界（生活や暮らし）の創造）

※今後の「内容」等の検討や総則・評価特別部会等での全体の調整も踏まえて引き続き検討。

目標

自立し生活を豊かにしていくための資質・能力について、身体性を伴う体験や多様な表現活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
<u>活動や体験の過程において</u> 、自分自身や <u>身近な人々</u> 、社会及び自然の特徴やよさに気付くとともに、 <u>他者との関わりを通して</u> これらの <u>気付きを深め</u> 、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。	身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、 <u>気付きや実感を基に</u> 自分自身や自分の生活について考えを <u>巡らせ</u> 、 <u>多様に表現する</u> ことができるようとする。	<u>身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ</u> 、 <u>他者と協働し</u> 、 <u>状況に応じて関わり方を調整する</u> とともに、 <u>意欲や自信をもって</u> 、 <u>学びや生活をより豊かにしようとする態度を養う</u> 。

見方・考え方

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりや、自分と他者との関係の中で捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとすること



検討項目④

内容の表形式化の
具体的な形式

検討項目④ 内容の表形式化の具体的な形式

- 内容の表形式化について、生活科においては現行学習指導要領では、「学習対象・学習活動等」、「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」と内容に示している中、生活科に適した表形式をどのように考えるか。



議論の前提

- 総則・評価特別部会では、
 - ✓ 「知・技」の内容のまとめに対応した「思・判・表」を並列で示す、「並列」パターン
 - ✓ 「思・判・表」の深まりを「知・技」が支えることを示す、「並行」パターン
- を示し、各教科等の特質に応じた学習過程の改善を図る上で、教師にイメージがより掴みやすいと考えられる方を選択することとした上で、上記のパターンの考え方を踏まえつつ、適した表形式による示し方について、各WGで検討することとしている。
- 表形式化に当たっては、学年別に目標を定めて内容を整理することはせず、「統合的な理解」「総合的な発揮」との関係性において内容を整理することとしている。また、各教科の性質や学校種・発達段階に応じて、1学年毎に示すのが適切と考えられるもの、低・中・高学年など複数学年でまとめて示すのが適切と考えられるものなど様々な場合が考えられるため、柔軟に記載を検討していくことが必要であることが示された。

具体的論点（案）

生活科における構造の示し方の方向性

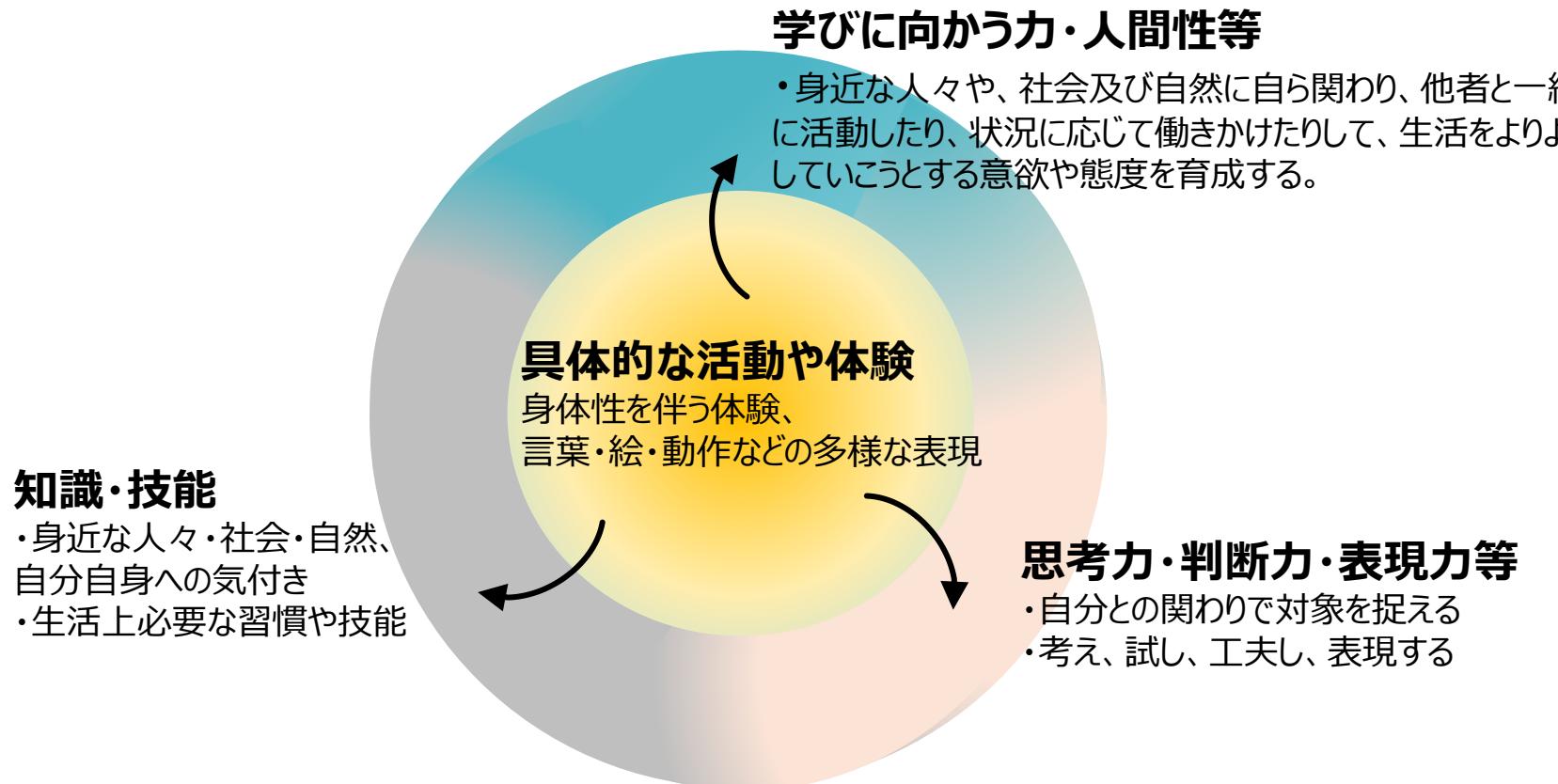
- 生活科の目標において資質・能力を三つの柱に分けて規定した意義としては、現行学習指導要領において、各教科等に共通して、育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で整理・明示することを前提としていることに加え、
 - 観点別評価により学習状況を分析的に捉えることができる
 - 目標標準拠評価を通じて指導と評価の一体化を図ることができるなどが挙げられる。このため「目標」については、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を分けて示すことが適當ではないか。
 - 一方、「内容」については、以下の諸点を踏まえ、引き続き、資質・能力を三つの柱ごとに独立して示さないことが適當であると考えられる。**【補足イメージ2】**
 - 生活科の学びは、児童一人一人の身体性に根差した具体的な活動や体験を起点として成立し、児童が対象や他者と関わりながら得る気付きや実感を通して、自分の生活を捉え直し、生活をよりよくしていくとする学びとして展開される点に特質がある。
 - こうした学びにおいては、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等は、活動や体験の中で相互に関わり合いながら同時的・一体的に立ち上がり育成していく。
 - 仮に、学習内容をこれらの資質・能力の三つの柱ごとに分節して示した場合、それぞれの資質・能力の育成を主眼とした学習活動が構成されやすくなり、「気付き、考え、行為することが連續して次の生活へつながっていく」という生活科において中核となる学びの過程が、学習活動の構成上、十分に位置付けられにくくなる恐れがある。
 - その結果、児童一人一人が、活動や体験を通して得た気付きや実感を基に思いや願いをもち、自分の生活を捉え直し、生活をよりよくしていくとする生活科固有の学びが形骸化し、生活科として意図する資質・能力が、生活に根差した力として十分に育成されにくくなることが考えられる。
- このため、生活科における内容の示し方については、学習活動と一体となって育成される資質・能力の姿を、一文で示す形式とすることが適切ではないか。その際、左記の表形式による示し方の考え方を踏まえつつ、生活科の教科特性に沿った表形式による示し方について検討するとしてはどうか。**【補足イメージ3】**

生活科における資質・能力の構成について（イメージ）

補足イメージ2

- 生活科における資質・能力については、現行学習指導要領の目標に掲げているとおり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の三つの柱として整理して捉えることができる。
- その上で、生活科における資質・能力の構成や育成の在り方については、三つの柱を個別・独立に育成しようとするよりも、具体的な活動や体験を通して、相互に関わり合いながら同時的・一体的に立ち上がり、生活科の学びの中で育成されていくことが期待されるものであり、自立し生活を豊かにしていくことにつながるものとして整理することが適当ではないか。
- このため、生活科における内容の示し方については、並列パターンをイメージしつつ、学習活動と一体となって育成される資質・能力を包括的に示す生活科オリジナルな形式とすることが妥当ではないか。

到達像：自立し生活を豊かにしていく



生活科の表形式化の形式

(現行の内容(1)の記載をベースとしたイメージ)

生活科において、今回の構造化を考える際には、各教科等が共通に押されてきた「個別の資質・能力の一体的育成を示すヨコ関係」「個別の資質・能力の深まりを示すタテ関係」を前提にしたうえで、子供の発達特性と教科特性から、以下の生活科における構造化の特徴があると考えることが大切になる。

- ①生活科の学びが、児童一人一人の身体性に根差した具体的な活動や体験を通して成立すること
- ②身体性を伴う体験や多様な表現活動による学習過程が「**考え方（思考）**、**気付き（知識）**、**行為する（態度）**」の資質・能力と相互に関連しながら展開されること

- ③学習過程全体を方向付ける観点から、行為する（態度）「**学びに向かう力、人間性**」の育成をとりわけ重視すること

→これら①～③を踏まえると、生活科において**内容を三つの資質・能力ごとに分節して示すことは、学習活動と資質・能力との関係を分断し、児童の身体性に根差した活動や体験を起点とする生活科固有の学びの姿を十分に生かしにくくなるため、学習過程の中で一体的に発現する資質・能力の姿を一文で示す形式とすることが適当ではないか。**

[第1学年及び第2学年]

1 目標（略）

2 内容

1の資質・能力を育成するため、次の内容を指導する。

[学校、家庭及び地域の生活に関する内容]

(1) 学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。



学校、家庭及び地域の生活に関する内容	
高次の資質・能力	〔第1学年及び第2学年〕
高次の資質・能力 (※知識及び技能に関する統合的な理解、思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮については、 検討項目⑤ で検討)	(1) 学校と生活 学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。

内容については、現行と同様、具体的な活動や体験、知識・技能と思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等を一体として記載

1. 内容の表形式化を行う趣旨・目的

- 論点整理では、分かりやすく使いやすい学習指導要領の実現を通じて、「主体的・対話的で深い学び」の実装を図る観点から、学習指導要領の内容について、中核的な概念等をもとに表形式で構造化を図る方針を示している
- 具体的には、
 - 「知・技」「思・判・表」^(※1)の深まりの可視化（「タテ」の関係の可視化）、
 - 「知・技」「思・判・表」の一体的育成の可視化（「ヨコ」の関係の可視化）により、
資質・能力の関係性の理解に基づき、それらを一体的に育成する教師の単元づくり^(※2)を助け、「深い学び」を授業で具現化しやすくなることを目指すとしている

(※1) 「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」を指す。以下同じ。
(※2) 題材づくりを含む。以下同じ。
- 総則・評価特別部会として、論点整理の趣旨を具現化する表形式での構造化の在り方を検討し、各教科等WGでの検討に資するよう、具体的に示す必要がある

2. 内容の表形式化の具体的な考え方（「並列」パターン）

- 示した趣旨を具体化する表形式を考える際、「タテ」の関係を可視化するには、個別の「知・技」「思・判・表」それぞれについて、児童生徒の中で相互に関連付けられ、構造化されて深い理解や習得に至った際の資質・能力の姿を示すことが重要となる。また、「ヨコ」の関係を可視化するには、「知・技」に対応して一体的に育成を目指す「思・判・表」を並列して記載することが考えられる
- これらを表形式で表現すると、以下のようなイメージが考えられる

中核的な概念の深い理解（仮称） XXXXXXXXXXXXXX	複雑な課題の解決（仮称） XXXXXXXXXXXXXX
知識及び技能 ・XXXXXXX ・XXXXXXX	思考力、判断力、表現力等 ・XXXXXXX ・XXXXXXX



- 一方、今回の構造化は、現行の「主体的・対話的で深い学び」の実装を図るものであることから、新たな用語の提起には慎重であるべきとの指摘もあり、現行との連續性を感じられる書きぶりとすることが重要。これを踏まえ、可能な限り現行で既に用いられている言葉を使いつつ構造化を図る観点から、以下のような示し方とすることが考えられないか

知識及び技能に関する統合的な理解 XXXXXXXXXXXXXX	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 XXXXXXXXXXXXXX
知識及び技能 ・XXXXXXX ・XXXXXXX	思考力、判断力、表現力等 ・XXXXXXX ・XXXXXXX

2. 内容の表形式化の具体的な考え方（「並列」パターン）（続き）

- このような示し方をする場合、学年区分の在り方も課題となる。現行では、各教科等の内容は、①学年別に示しているもの、②複数学年別に示しているもの、③指導する学年を示していないものがあり、①及び②については、指定する学年での指導を求めているほか、学年別目標も示している
- この点、上記のような構造化を行った場合、「統合的な理解」「総合的な発揮」にぶら下がる個別の「知・技」等が複数学年にまたがる場合も考えられる。その場合、引き続き学年毎に内容を示すこととすると、同じ「統合的な理解」「総合的な発揮」にぶら下がる資質・能力であっても学年毎に分断して示されることとなり、資質・能力の深まりを体系的に理解することに課題が残る
- また、論点整理では、教科書作成等の観点から引き続き学年区分の一定の記載は必要だが、多様な子供の実態に応じるため学年区分に囚われず柔軟に教育課程の編成・実施が可能であることを明確にすべきとされている



- これらを踏まえ、表形式化に当たっては、学年別に目標を定めて内容を整理することはせず、「統合的な理解」「総合的な発揮」との関係性において内容を整理することとし、指導を想定する学年を明示する場合も、それに囚われず教育課程の編成が可能であることが分かるよう、例えば「○学年相当」という形式で示してはどうか（次頁のイメージ参照）
- こうした指導を想定する学年の記載については、各教科の性質や学校種・発達段階に応じて、1学年毎に示すのが適切と考えられるものの、低・中・高学年など複数学年でまとめて示すのが適切と考えられるもの、示さないことが適切と考えられるものなど様々な場合が考えられるため、柔軟に記載を検討していくことが必要ではないか

資質・能力の一体的育成の可視化

(1) 項目名

想定する指導学年を明示する場合は、「○学年相当」という形で示す。(示さない場合や、複数学年毎に示す場合、単学年毎に示す場合など柔軟に対応)

(1) 項目名	
	知識及び技能に関する統合的な理解
○学年相当	<p>知識及び技能に関する統合的な理解</p> <p>この内容のまとめを通じて獲得して欲しい統合的な理解等を示す（検討項目④で詳細を検討）</p> <p>（小見出し）</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ： <p>右に示す思考・判断・表現の過程で、上に示す統合的な理解を獲得するために必要な要素となる知識及び技能を示す</p> <p>（検討項目⑤で詳細を検討）</p>
○学年相当	<p>（小見出し）</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ： <p>（小見出し）</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ：
○学年相当	<p>（小見出し）</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ： <p>（小見出し）</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ：
(内容の取扱い)	<p>（小見出し）</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ：

※表の読み方を示す柱書きや見出し、各項目の番号の示し方等の平仄については告示の検討に際して技術的に検討

2. 内容の表形式化の具体的な考え方（「並行」パターン）

- 「並列」パターンでは、「知・技」に対応して一体的に育成を目指す「思・判・表」を並列して示すことで「ヨコ」の関係を示すこととしている。このパターンは、「知・技」の内容の系統性が明確で、「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・判・表」が想定できる教科では具体的にイメージしやすく、「思・判・表」の活動を通じて対応する「知・技」を育成していく学習指導への改善に資することが期待できる

(例) 数学では、関数における「思・判・表」と図形における「思・判・表」は異なるものが想定される

- 一方で、教科によっては、「知・技」よりも「思・判・表」の系統性が明確で、「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・判・表」が想定しにくく、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助けるといった構造のものもある

(例) 国語では、漢字・文法・情報の扱い方などの「知・技」に対応した「思・判・表」が明確ではなく、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことといった「思・判・表」のそれぞれの深まりを、「知・技」が全体として支えている構造となっている

- このような教科は、「並列」パターンのように「知・技」に対応した「思・判・表」を並列して見せることの意義は小さい。むしろ下部のイメージのように、「思・判・表」の深まりをまず明確にできるよう列として示し、その深まりを「知・技」が支えながら一体的に育まれていくことを視覚的に示すことにより、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助けることを具体的にイメージしやすく、学習指導への改善に資することが期待できる（次頁イメージ図参照）

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 xxxxxxxxxxxxxx	1)	•xxxxxxxx	•xxxxxxxx	•xxxxxxxx
	2)	•xxxxxxxx	•xxxxxxxx	•xxxxxxxx
	3)	•xxxxxxxx	•xxxxxxxx	•xxxxxxxx
知識及び技能に関する統合的な理解 xxxxxxxxxxxxxx	•xxxxxxxx •xxxxxxxx			

資質・能力の深まりの可視化

The diagram illustrates the visualization of the depth of qualities and abilities (資質・能力の深まりの可視化) using a parallel table structure (並行パターン). The table is divided into three main sections: 思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 (Top Left), 知識及び技能に関する統合的な理解 (Top Right), and 内容の取扱い (Bottom). Each section contains a list of items (1) through (4) with corresponding descriptions. A horizontal orange arrow at the top spans the width of the table, and a vertical orange arrow on the right side spans its height, both pointing towards the center. Callout boxes provide additional context for specific entries.

	<input type="radio"/> 学年相当	<input type="radio"/> 学年相当	<input type="radio"/> 学年相当
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	(1) 項目名 (小見出し) · · (2) 項目名 (小見出し) · · (3) 項目名 (小見出し) · ·	(小見出し) · · 下に示す知識及び技能を活用しながら、左に示す複雑な課題の解決をする上で必要な要素となる思考力、判断力、表現力等を示す。 (検討項目⑤で詳細を検討)	(小見出し) · · (小見出し) · ·
知識及び技能に関する統合的な理解	(1) 項目名 (小見出し) · · (2) 項目名 (小見出し) · · (3) 項目名 (小見出し) · · (4) 項目名 (小見出し) · ·	左に示す統合的な理解を獲得し、上に示す思考・判断・表現を豊かにするために必要となる知識及び技能を示す (検討項目⑤で詳細を検討)	(小見出し) · · (小見出し) · ·
(内容の取扱い)		学年相當に分けて示す必要がない場合は、可能な限り繰り返しを避け、セルを統合して示すなど簡素な示し方となるよう工夫する。	

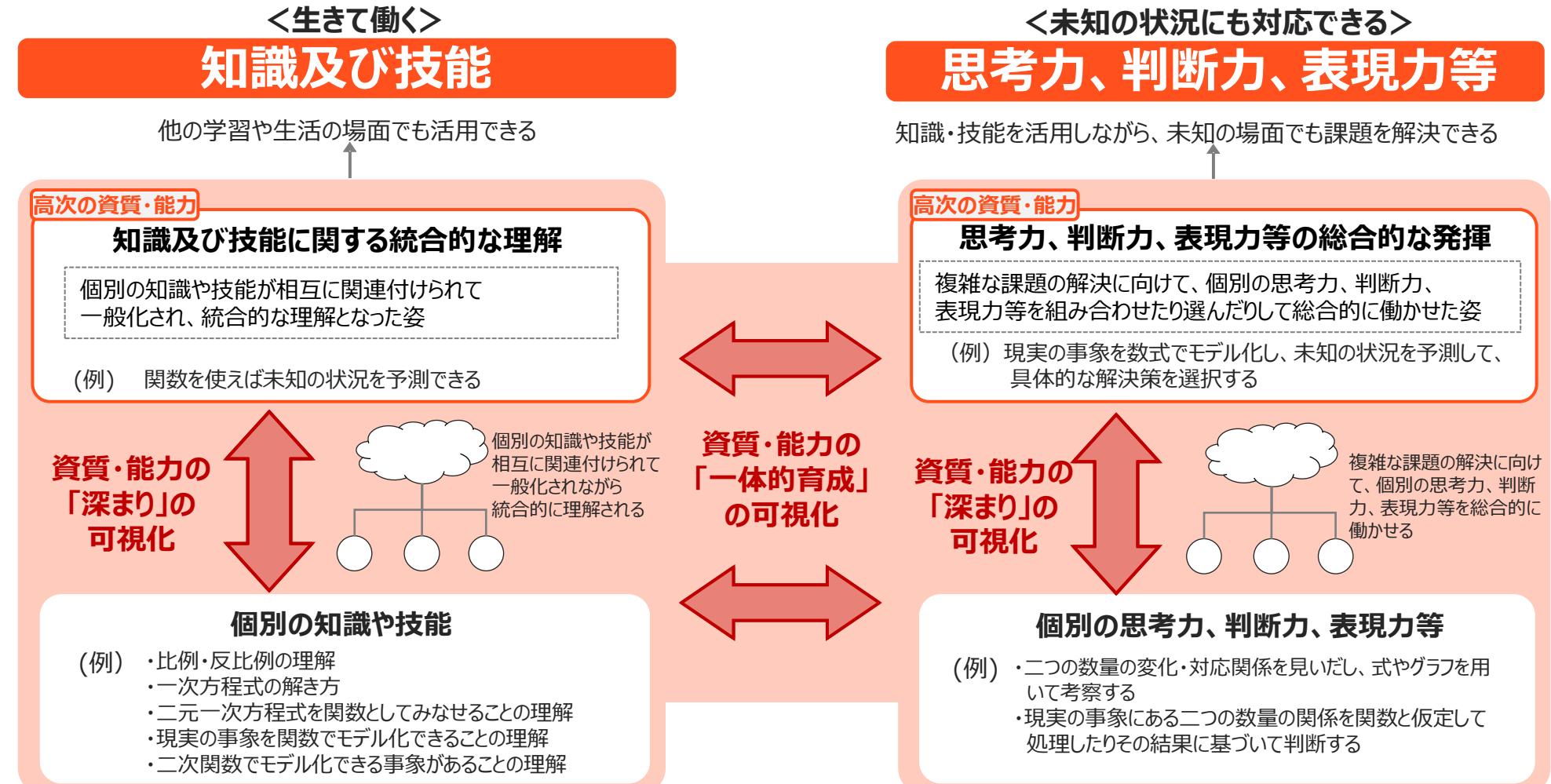


検討項目⑤

高次の資質・能力

「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」の可視化による「深い学び」の具現化

- 知識の理解も、それが生きて働くように深く学ぶことが重要。思考力、判断力、表現力等も、社会や生活で直面する未知の状況でも課題解決に繋げていけるよう「質」を高めることが重要（資質・能力の「深まり」）
- ある程度の知識・技能なしに思考・判断・表現することは難しいし、思考・判断・表現を伴う学習活動なしに、知識の深い理解と技能の確かな定着は難しい（資質・能力の「一体的育成」）
→こうした「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」を学習指導要領上で可視化することにより、資質・能力の関係性の理解や、それらを一体的に育成するための教師の単元づくりを助け、「深い学び」を授業で具現化しやすくする



1. 「高次の資質・能力」の可視化の目的

- 検討項目③では表形式での内容の構造化で、
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化
(従前の「タテ」の関係の可視化)
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の一体的育成の可視化
(従前の「ヨコ」の関係の可視化)

を図ることにより、資質・能力の関係性の理解に基づき、それらを
一体的に育成する単元づくりを助け「深い学び」を具現化しやすく
する方策を検討した

- このうち特に、「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」(※以下、総称して「高次の資質・能力」)を示すことについては、「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化を通じて「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする役割を担うもの

※論点整理では、「知・技」の深まりを示すものを「中核的な概念の深い理解」、「思・判・表」の深まりを示すものを「複雑な課題の解決」と仮称し、それらをまとめ「中核的な概念等」と呼んでいたが、新たな用語が増えることを避けるため現行でも用いられている言葉を用いることとしたもの。「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」をまとめて呼称する際、以後「高次の資質・能力」と呼ぶこととする

2. 各WGでの検討に当たっての考え方

- こうした役割を果たす「高次の資質・能力」を各WGで具体的に抽出する際、各教科等固有の学習過程の改善を図るためには、教科ごとの特質に応じて検討が行われる必要があり、書きぶりを現時点で一律に整理すべきものではない
- 一方で、各教科等での「高次の資質・能力」は、備えるべき要素や性質等について、一定の共通性があることにより、各教科等を横断して適切に機能を発揮することが期待できる
- 各教科等の独自性を活かしつつ、共通に備えるべき要素や性質等が確保された「高次の資質・能力」の書きぶりとなるよう、次頁のように「高次の資質・能力」がその目的を踏まえたものとなっていることを担保するチェックポイントを示した上で、各教科等WGでの検討を深めてはどうか（次頁参照）
- なお、「全てのポイントに照らして異論の余地のない」ものを検討することは困難な場合も考えられるため、各教科等の授業改善に資する点を重視しつつ検討を進めるべきではないか

「高次の資質・能力」を検討する上でのチェックポイント（案）

【A 教科等の本質的意義の中核に照らした重要性の観点】

- ・目標の達成に資する上で重要であるとともに、各教科等の本質的意義の中核（「見方・考え方」）に照らし適切なものであるといえるか

【B 資質・能力の深まりを示す観点】

- ・要素となる個別の資質・能力の「深まり」を示す事ができているか。具体的には、内容のまとまりを単に要約した「見出し」に留まるのではなく、個別の資質・能力が児童生徒の中で相互に関連付けられて、統合的に獲得された際の姿を示すことができているか
- ・要素となる個別の資質・能力を学ぶことの意義（※）や、それを広く社会において、いつ、どのような文脈で活用することができるのか、教師がイメージしやすいものとなっているか

（※）学ぶことの「意義」は必ずしも実生活における実用的な側面にとどまらない点に留意

【C 深い学びを実現する単元づくりを助ける観点】

- ・教師が単元構想時に、「知識及び技能の統合的な理解」と、それにぶら下がる個別の「知・技」、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、単元を通じて児童生徒が追究する本質的な「問い合わせ」を構想する上で参考になるか
- ・教師が単元構想時に、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、論述・レポート・発表・作品製作等、単元を通じて児童生徒が資質・能力を総合的に発揮しながら取り組む課題を構想する上で参考になるか

【D 分かりやすさ等の観点】

- ・経験の浅い教師も含めて、一人一人の教師にとって、分かりやすく、使いやすいことに加え、教科等の面白さや魅力が伝わる文言となっているか（学習・指導を通じて、最終的には児童生徒自身が掴むことができる必要があるという点も留意）
- ・学校種・学年等、発達段階に即して妥当なものとなっているか（系統性等の重視により、発達段階に照らし過度に抽象的となっていないか等）

検討項目⑤ 高次の資質・能力

- 生活科における「高次の資質・能力」をどのように考えるか。



議論の前提

【総則・評価部会での議論】

- 総則・評価特別部会では、「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」(以下「高次の資質・能力」)について、
- 「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化を通じて「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする役割を担うもの
- こうした役割を果たす「高次の資質・能力」を各WGで具体的に抽出する際、各教科等固有の学習過程の改善を図るためにには、教科ごとの特質に応じて検討が行われる必要があり、書きぶりを現時点で一律に整理すべきものではない
とした上で、
- 「高次の資質・能力」がその目的を踏まえたものとなっていることを担保するチェックポイントを示した上で、各教科等WGでの検討を深めることとしている。

【チェックポイントとして示された具体的な観点】

- A 教科等の本質的意義の中核に照らした重要性の観点
- B 資質・能力の深まりを示す観点
- C 深い学びを実現する単元づくりを助ける観点
- D 分かりやすさ等の観点

具体的論点（案）

- 「高次の資質・能力」については、備えるべき要素や性質等の共通性を確保することが重要である一方、生活科においては、
 - 小学校低学年にのみ設置された教科であり、具体的な活動や体験を通して学びが成立すること
 - 知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等が同時的・一体的に生起するという学びの特質を有していること
 - 他教科のように、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」ごとに内容を区分して示していないことを踏まえれば、生活科の特性に即した「高次の資質・能力」について検討する必要がある。
- その際、生活科における「高次の資質・能力」については、各内容における具体的な活動や体験の学習過程を通して、児童がどのような対象に働きかけ思考し、多様な表現をもとにどのように気付いていくのか、また、その過程において、どのような学びに向かう力・人間性等が表出・涵養されるのかを明確にすることが、指導の改善・充実につながると考えられる。
- このことは、活動や体験を通した気付きや意味付けを深めていく生活科における「深い学び」を具体的にイメージしやすくするという点においても、「高次の資質・能力」が果たす役割に資するものである。
- 以上を踏まえ、生活科における「高次の資質・能力」については、知識・技能や思考力・判断力・表現力等が発揮される学習過程と、その過程で一体となって育成されることが期待される学びに向かう力・人間性等を分けて示すのではなく、一体的に記載することとした上で、チェックポイントに示された観点を踏まえ、記載ぶりを検討してはどうか。
- また、「高次の資質・能力」の粒度については、現行の生活科の内容の三つの階層を基本単位として位置付けることとしてはどうか。
- さらに、現行において上記の内容の三つの階層ごとに示されている学年目標については、「高次の資質・能力」が目標と内容との間に位置付く概念であることを踏まえ、重複が生じる部分を整理し、「高次の資質・能力」に統合する形で整理することとしてはどうか。

【補足イメージ4】

高次の資質・能力の示し方 〔学校、家庭及び地域の生活に関する内容〕の現行の記載をベースとしたイメージ)

- 現行の学年目標（1）をベースにしつつ、児童が「自分と生活とのつながりを繰り返し考え」る中で、自分と生活とのつながりをより一層強く意識し、自分の生活が「多くの人々や場所と関わって成り立っていることへの気付きを深めている」姿を高次の資質・能力として明確に示してはどうか。

【現行の記載】

1 目 標

- (1) 学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようとする。

2 内 容

1の資質・能力を育成するため、次の内容を指導する。

〔学校、家庭及び地域の生活に関する内容〕

- (1) 学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。

- (2) 家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分でできることなどについて考えることができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。

- (3) 地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。

【高次の資質・能力の示し方】

〔学校、家庭及び地域の生活に関する内容〕	
高次の資質・能力	〔学校、家庭及び地域の生活に関する内容〕
	<p>身近な人々、社会及び自然に親しみや愛着をもち、集団や社会の一員として安全で適切な行動することに向かうように、<u>自分と生活とのつながりを繰り返し考え、多くの人々や場所と関わって成り立っていることへの気付きを深めている</u>。</p>
第1学年及び第2学年	<p>(1) 学校と生活 学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。</p> <p>(2) 家庭と生活 家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分でできることなどについて考えることができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。</p> <p>(3) 地域と生活 地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えことができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。</p>

高次の資質・能力の示し方

([身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容]の現行の記載をベースとしたイメージ)

- 現行の学年目標（2）をベースにしつつ、児童が「自分と生活とのつながりを広げたり深めたりしながら考え」ことで、身体で世界を捉え、身近な世界に働きかけ、「自分たちの生活につながっていることへの気付きを深めている」姿を、高次の資質・能力として明確に示してはどうか。

【現行の記載】

1 目標

- (2) 身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。

2 内容

1の資質・能力を育成するため、次の内容を指導する。

(身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容)

- (4) 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり動きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用しようとする。

- (5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

- (6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

- (7) 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

- (8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。

【高次の資質・能力の示し方案】	
	【身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容】
高次の資質・能力	自分たちの生活をよりよくすることに向かうように、 <u>自分と生活とのつながりを広げたり深めたりしながら考え</u> 、身近な人々、社会及び自然との関わりが <u>自分たちの生活につながっていることへの気付きを深めている</u> 。
第1学年及び第2学年	<p>(4) 公共物や公共施設の利用 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり動きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用しようとする。</p> <p>(5) 季節の変化と生活 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする</p> <p>(6) 自然や物を使った遊び 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。</p> <p>(7) 動植物の飼育・栽培 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。</p> <p>(8) 生活や出来事の伝え合い 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。</p>

高次の資質・能力の示し方

(〔自己自身の生活や成長に関する内容〕の現行の記載をベースとしたイメージ)

- 学年目標（3）をベースにしつつ、児童が「自分の生活を振り返る中で、これまでの出来事や関わりを手掛かりにして考えることで、自己自身を見つめ、自分の成長を振り返り、「自分のよさや可能性への気付きを深めている」姿を高次の資質・能力として明確に示してはどうか。

【現行の記載】

1 目 標

(3) 自己自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようとする。

2 内 容

1 の資質・能力を育成するため、次の内容を指導する。
〔自己自身の生活や成長に関する内容〕

(9) 自己自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かるとともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもち、これから成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする。



【高次の資質・能力の示し方】

〔自己自身の生活や成長に関する内容〕	
高次の資質・能力	第1学年及び第2学年
<p>意欲と自信を高めながら生活することに向かうように、<u>自分の生活を振り返る中で、これまでの出来事や関わりを手掛かりに、自分の成長や身近な人々の支えについて考え、自分のよさや可能性への気付きを深めている。</u></p> <p>(9) 自分の成長 自己自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かるとともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもち、からの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする。</p>	

※今後の「内容」等の検討や総則・評価特別部会等での全体の調整も踏まえて引き続き検討。